

いわき農林水産ニュース

(ふくしまからはじめよう。「食」と「ふるさと」新生運動ニュース)



12月号 発行 平成26年 12月26日



いわき地域特定家畜伝染病 防疫演習

11月10日(月)、いわき市南部アリーナにおいて防疫演習を開催しました。この演習は、家畜法定伝染病が発生した場合に備え、迅速かつ的確なまん延防止措置を講じるため、関係機関連携による初動防疫体制の強化と発生時の現地防疫作業等の確認を目的に開催したものです。

当日は、いわき市、関係団体、家畜防疫員、警察署、県関係機関職員の87名が参加し、発生から連絡会議開催までの連絡調整等をロールプレイングにより演習し、参加者体験型による防護服の着脱、殺処分作業、消毒ポイントでの車両消毒等の訓練を行いました。



(防疫作業員による捕鳥訓練の様子)
(農業振興普及部)



J Aいわき市農業振興大会

12月5日(金)、市内パレスいわやにおいて、J Aいわき市農業振興大会が開催され、200名を超える農家、農業関係者の参加がありました。

冒頭、J Aいわき市甲高会長より、J Aが乗り越えなければならない6つのハードルとして、①風評被害、②TPP問題、③水田転作、④米価下落、⑤J Aへの風当たり、⑥合併実現についての説明と、J Aにできることは何かを考え、新たな事業計画に取り組むとのあいさつがありました。いわき市清水市長に続き、松本いわき農林事務所長より、「今後は農産物の安全と美味しさを伝える取り組みが一層大切になってくる」との祝辞がありました。

続いて、J Aいわき市馬上理事長より農業とJ Aを取り巻く情勢報告、J A片寄常務より新規需要米や「いわきねぎ」の推進など新たな農業振興計画についての説明がありました。

その後、農業生産法人あかい菜園(株)代表取締役船生氏より「補助事業を活用した施設拡大」と題して最先端の施設園芸の取組みについて、また、J Aいわき市ねぎ部会小宅部会長より「「いわきねぎ」の再起に向けて」と題して、県内No.1を誇るねぎ産地の現状と展開についての事例報告がありました。小宅部会長は、(ねぎ)PRジャンパーを着用し、6次化開発商品の「いわきねぎドレッシング」を紹介するとともに遊休農地等の活用による「いわきねぎ」の作付け拡大を呼びかけました。

さらに、磐城農業高等学校の生徒より地元農業と水産業の風評払拭に向けた6次化プロジェクトとして、「梨48(ジャム、焼肉のタレ、ドレッシング)」、「カジキバーガー」の商品開発や全国へのPR活動について紹介がありました。

今大会を契機に、いわき地方の農業のさらなる飛躍が期待されます。



(ねぎの取組みを紹介する小宅部会長(左))



(6次化製品の展示)

(農業振興普及部)

「くみずほ」の森プロジェクト ボランティア植樹活動

11月8日（土）、平下大越地区において株式会社みずほ銀行フィナンシャルグループ（以下みずほFC）による「くみずほ」の森プロジェクト」第1回植樹活動が行われました。

この活動は、「企業の森林（もり）づくり」として、企業、県、市、森林所有者により、植樹及び保育作業の実施に関する協定を締結し実施されるものです。

みずほFCが、津波で被災した海岸防災林の再生に取り組むため、昨年4月に協定を締結し、これまでは下大越地区周辺の海岸清掃等の活動が中心でしたが、今回は当管内で初めての植樹活動となりました。

植樹活動には、みずほFC内のたくさんのボランティア希望者の中から抽選で選ばれた、県内だけでなく宮城や東京から約150名の皆さんが参加しました。

当日は天気にも恵まれ、下大越地区からの応援もあって、0.45ヘクタールの箇所にクロマツ苗が4500本植樹されました。

今後、海岸防災林の再生に向け、来春以降も引き続き植樹活動などが行われる予定です。



（みずほFCと下大越地区の皆さんによる植樹）



（植樹活動終了後参加者全員による記念写真）
（森林林業部）



太陽追尾型の 営農型発電が稼働

12月8日（金）、農業生産法人「とまとランドいわき」が運営するアグリパークいわき内（いわき市平下神谷）の農地に整備した営農型太陽光発電設備の竣工式が行われました。

太陽光発電をしながら、農作物の栽培を行うことが出来る「営農型」の発電設備としては国内最大級であり、農業収入と売電による新しい農業の形として期待されます。

約4,000㎡の農地に太陽光パネル計1,875枚が設置され、出力は412キロワット。小型パネルは縦横5枚ずつ、25枚を1本の支柱で支え、支柱は全部で75基にのびます。

営農型の太陽光発電設備には高い架台の上に固定する「固定型」もありますが、この設備は設置場所の緯度や経度、日時をコンピューターに入力すると、太陽経路を自動算出し、太陽光パネルの向きが自動的に変わる「追尾型」で、発電量は固定型の約1.4倍から1.5倍になります。年間発電量は71万キロワット時を見込み、ほぼ全量を電力会社がい取りすることとなっています。

設置面積は支柱部分のみのため、農地が広く使え、また、地上に落とす影も小さく、農作物への影響も少なくなります。

農地では来春から加工用イチジクの栽培を始め、2年後には果実を加工業者に販売する予定です。



（稼働前：パネルの向きは夜間もこの状態）



（稼働後：日中は太陽を自動追尾する）
（企画部）



赤井小5年生 収穫したお米を味わい、ご満悦

11月25日（火）、いわき市立赤井小学校5年生児童58名による、田んぼの学校「収穫祭」が行われました。

田んぼの学校は、県の「ふくしまの農育推進事業」により、地域の未来を担う子どもたちが、『農業・農村地域の大切さ』や『環境の大切さ』、『食・命の大切さ』について理解し、豊かな感性を育むことなどを目的とした体験型学習の一環で、今回で第6回目となりました。

これまで児童達は、5月に田植え、7月に水質調査や生き物・分けつ調査、9月にかかし作り、10月に稲刈り、11月に脱穀と、年間を通じて米作りに携わってきました。

今回の収穫祭では、田んぼの学校の先生としてお世話になってきた地元協力農家の根本氏を招待し、児童からの田んぼの学校に関するクイズや祝いの舞などを披露した祝いの会のほか、関係者全員で会食を行いました。また、食育講義としていわき農林事務所職員が地産地消や食料自給率の話、米の全量全袋検査の説明を行いました。

会食では、学習田から収穫した米を使っておにぎりを握り、保護者の方や地元協力農家の方と一緒においしく味わいました。「皆で協力して作ったお米はとてもおいしかった。」と話す児童もあり、心に残る有意義な活動となったようです。

いわき農林事務所からの講義では、児童はメモを取りながら真剣に話を聞くなど、日本の食料自給率が39%しかないことや一般家庭から出る食べ残しの量が多いことに大変驚いた様子で、食料の大切さを再確認したようでした。また、福島県で行っている米の全量全袋検査の説明と動画から、児童達は福島県の米の安全性について理解を深めました。

次回は、今年度の田んぼの学校の集大成として、来年2月に『成果発表会』と『修了式』を行う予定です。



(真剣に講義に耳を傾ける児童)



(お祝いの会では、息の合ったよさこいを披露)



(みんなでおいしくいただきました)
(農村整備部)





第2回学校給食における 地場産物活用のための勉強会

12月9日（火）、県いわき合同庁舎において、県主催による「第2回学校給食における地場産物活用のための勉強会」が開催されました。これは、学校給食への地場産物（※1）の活用促進を図るために開催したものです。2回目となる今回は、いわき市内の小中学校給食関係者、いわき市と県の行政関係者の外、生産・流通関係者にも参加いただき約30名の出席がありました。

いわき市の学校給食における地場産物の活用割合（※2）は、震災前の平成22年度に約30%でしたが、震災後の平成25年度には数%まで減少しました。県全体での活用割合を見ても平成22年度に36.1%、平成25年度には約20%まで減少しており、県では平成32年度までに40%の達成を目標にしています。

市内には現在、学校給食共同調理場が7施設あります。学校給食の特徴として、短時間で大量に調理することが必要で、事故防止のため厳しい衛生管理が求められています。具体的には、食材は当日納品で、調理後2時間以内に喫食を基本となっています。とりわけ、大規模調理場では、毎日1万食分を調理（インゲンのごま和えの場合は330kgのインゲンが必要になる）しており、下処理の機械化や規格が揃った食材の納品が不可欠となっています。

今回の勉強会では、学校給食において地場産物を活用するための具体的な取組みについて検討しました。地場産物の供給を増やすため事前に献立を生産者側に知らせ栽培してもらうこと。JA等と連携し、生産や生育状況の情報提供を受けること。生産・流通側からは、事前に供給可能な地場産物を学校給食側へ情報提供してもらうとともに、いわき市産にこだわらず、県内産の受注を増やしていくこと。食育を推進するため、学校で子供達が栽培した農産物を学校給食として利用することなどが提案されました。

いわき市では、12月から3年ぶりに学校給食で「いわき産米」が使用されるなど地場産物の活用が徐々に進められています。この動きをさらに加速するために、関係者一体となって安全でおいしい地場産物の使用や食育の推進を図っていきます。

※注1：福島県内産の食品。

※注2：学校給食に使用した全食材品数のうち地場産物数の割合。



（グループワークの様子）

（企画部）



平成26年度福島県 青年・女性漁業者交流大会

12月5日（金）、いわき市中央台公民館において、平成26年度福島県青年・女性漁業者交流大会が開催されました。本大会は、各漁業協同組合の青壮年部や女性部が日頃取り組んでいる各種活動について発表し、漁業技術の向上や地域の活性化に関する知識を共有することによって、活力ある漁業地域の形成と振興を図ることを目的としています。

今年度は、6課題の発表が行われ、風評払拭のための活動や試験操業の取組みなど、漁業が直面している課題に関する発表が中心になりました。

大会は審査会形式で行われ、「ふくしまの今を伝える漁師たち～風評払拭への取り組み～」と題した相馬双葉漁業協同組合相馬原釜支所青壮年部の発表が1位となり、県知事賞を受賞しました。また、「浜の母ちゃんの挑戦～風評に打ち勝つために～」と題した福島県漁協女性部連絡協議会の発表が優秀賞となり、それぞれ、平成27年2月に東京で開催される「第20回全国青年・女性漁業者交流大会」へ出場することが決まりました。



（各受賞者）

（水産事務所）

平成26年度第1回いわき地域産業6次化ネットワーク交流会



12月11日（木）、県いわき合同庁舎において、いわき地域産業6次化運営会議（事務局：いわき地方振興局、いわき農林事務所、水産事務所）主催による平成26年度第1回いわき地域産業6次化ネットワーク交流会を開催しました。

ネットワーク交流会は、農林水産業の復興や新たな成長戦略として注目されている地域産業6次化をさらに推進することを目的に、約60名が参加し、2部構成で行われました。

第1部では、商品開発・販路開拓の専門家であり、6次化イノベーターやふくしま6次化創業塾講師などを務め、福島県の地域産業6次化とも関係が深い、株式会社システムプランニング代表取締役鈴木栄治氏が「消費者視点に立った商品開発の進め方～バイヤーはこんな商品を求めている～」と題して講演を行いました。

講演の中で鈴木氏は、「6次化商品開発にあたっては、まず、消費者視点での不満点を探し、明確な消費者像を考えながらターゲットを絞った商品開発を進めた方がよい。」とのアドバイスに参加者は大きく頷いていました。

また、「産地リレーによる高品質な『大根・つま』の年間安定供給」や「美幌豚醬まるまんま開発事業」などの地域産業6次化の成功例の紹介がありました。参加者は、「しなやかに」、「したたかに」付加価値を付けた成功事例の中から自社の6次化商品の開発・販路開拓につながるヒントを得たようでした。

第2部では、6次化商品プレゼンテーション・ブラッシュアップが行われ、5つの事業者が持参した商品について、鈴木氏が商品開発や販路についてアドバイスしました。

アドバイスは、商品を持参した事業者のみならず、その他の参加者にとっても商品開発や販路開拓の参考になったようでした。

※地域産業6次化：農林水産業（1次産業）と加工業（2次産業）サービス業（3次産業）など、他の産業が連携・融合することにより付加価値の創出を目指す試み。



（鈴木氏による講演の様子）

（企画部）



県産材製材品表面線量調査を実施

福島県は、製材品の出荷量の約3分の2を県外に出荷する全国でも有数の製材品の供給県です。しかし、原子力発電所事故により、県産材製材品への風評が発生し、県外への流通が一部停止したこともありました。

そこで、福島県では平成23年11月から製材工場等において、県産材製材品の表面放射線量を測定し、その結果をHP（※）等で公表しています。

いわき管内では、県産材を製材する29工場を対象に、6月、9月、12月、3月と3か月ごとに各工場で10本を抽出し、サーベイメータを使い製材品表面からの放射線量を測定しています。

平成23年度から実施しているこの調査の結果、専門家からは環境や健康への影響はないとの評価が得られています。今後も県産材製材品を安心して利用してもらえるよう継続して調査を実施していく計画です。

※県産材製材品の放射線量等調査結果のURL

<http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36055c/kensanzaityoua.html>



（表面線量の測定の様子）

（森林林業部）

**福島県漁業調査指導船「いわき丸」完工
～小名浜港へ～**

10月9日(木)、東日本大震災で沈没し代船の建造が完工した「いわき丸」が、小名浜港に回航しました。

「いわき丸」は、新たに海底土壤に含まれる放射性物質濃度を連続的に測定できる最新機器を装備し、海底面を広域的に調査することが可能となりました。

また、水産資源の来遊や分布量、本県沖合360kmまでの海洋環境を詳細に把握できる調査機器を搭載しています。

水産資源の持続的かつ有効利用と風評払拭に資する調査に取り組み、本県漁業の復興を支援して参ります。



(いわき丸) (水産事務所)



**いわき地方の農林畜産物
モニタリング検査結果**

福島県が行った、いわき地方の11月の農林畜産物の放射性セシウムモニタリング検査結果をお知らせします。

(表1) 農林畜産物のセシウム検査結果(11月末現在)

1点も検出されなかった品目と検体数	検体の一部が検出された品目と検体数			計
17品目	2品目(※1)			19品目
35検体	検出限界値以下の検体 17検体	基準値内で検出された検体 20検体	基準値超過の検体 0検体	72検体

※1: ユズ、大豆

検査した19品目72検体のうち、17品目35検体において、放射性セシウムは検出限界値以下でした。内訳は(表2)のとおりです。

(表2) 放射性セシウムが1点も検出されなかった品目と検体数

ハクサイ 2、コマツナ 2、ホウレンソウ 1、キャベツ 1、シュンギク(施設) 1、丸ダイコン 1、ヤーコン 1、ミカン 2、ギンナン 2、リンゴ 1、菌床しいたけ(施設) 3、菌床なめこ(施設) 2、エリンギ(施設) 1、小豆 3、秋そば 5、牛肉 3、原乳 4

なお、ユズ、大豆については、それぞれ19、1検体に100ベクレル/kg以下の放射性セシウムが検出されました。内訳は(表3)のとおりです。

(表3) 基準値内で検出された品目と検体数

	ユズ	大豆
検体数(うち基準値内)	28(28)	9(9)
内訳		
100ベクレル以下(最大値:ベクレル/kg)	19(39.0)	1(69.0)
検出限界値以下	9	8

11月30日(日)現在、いわき地方産の農林畜産物で出荷が制限されている品目は、(表4)のとおりです。

(表4) 出荷制限及び出荷自粛品目(11月末現在)

制限、自粛	区分	品目
出荷制限(8品目)	野菜・根菜・芋類	—
	果物	ユズ
	穀類	—
	山菜	たけのこ、ぜんまい、わらび、こしあぶら、たらめ(野生のものに限る)
	きのこ	原木なめこ(露地)、野生きのこ
畜産物	—	—
出荷自粛(1品目)	山菜	さんしょう(野生のものに限る)

また、昨年に引き続き平成26年産の米についても全量全袋検査を実施しており、11月末までの検査点数533,497点のうち、99.98%の533,371点が測定機器の測定下限値未満、126点が基準値内で検出が確認されましたが、基準値を超過したものはありません。

(表5) 玄米(平成26年産)検査状況(11月末現在)

測定値区分(単位:ベクレル/kg)	測定下限値未満(<25)	25? 50	51? 75	76? 100	100以上	計
検査点数(点)	533,371	126	0	0	—	533,497
割合(%)	99.98	0.02	0.00	0.00	—	100.00

調査結果は、福島県のホームページ「ふくしま新発売。」の農林水産物モニタリング情報、平成25年産米については、「ふくしまの恵み安全対策協議会」で簡単に検索できますので、ご確認ください。

(企画部)

🌸 いわき花き鉢物研究会員が生産している季節の鉢花 🌸

いわき花き鉢物研究会員が生産している、様々な季節の鉢花を紹介します。

◇アルストロメリア◇
(ユリ科)

チリ、ペルー、ブラジルなど南米原産ですが、ヨーロッパで品種改良され、日本には昭和初期に紹介されました。

主に切り花として利用されていますが、わい性のものも育成され、鉢物としても人気があります。

6枚ある花弁のうち、内側の3枚に斑点や縞模様があり、葉が付け根のところで180度反転しているのが特徴です。

四季咲き性の品種もあり、光が十分に当たる場所に置くと長く楽しむことができます。



◇ゼラニウム◇
(フウロウソウ科)

現在園芸化されているもののほとんどは、南アフリカに由来します。

園芸上は「ゼラニウム」と呼ばれていますが、「ゼラニウム属」はゲンノショウコ等別のものを指し、植物分類学上は「ペラルゴニウム属」に属します。

日本には江戸時代末期に伝わったとされ、その当時は、花より葉の様子が人気を呼びました。

ゾーナルゼラニウムは、鉢物、花壇苗としてほぼ周年出荷されています。



(農業振興普及部)

🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸
いわきの旬な情報をお知らせします！

甘酸っぱいジューシーなおいしさ
いわきの『いちご』をご紹介します。

皆さんは、ハウス栽培のいちごが気温の低くなる12月から1月にかけてじっくり熟し、最も美味しくなることをご存じでしょうか。

日本にいちごが伝来したのは江戸時代末期で、オランダ船で長崎にもたらされたことから「オランダいちご」と呼ばれていました。いわき地域におけるいちご生産は、昭和40年代から水稲の転作作物として導入されました。

ビタミンCが豊富に含まれているいちごは、老若男女問わず人気が高いため、全国各地で地域オリジナル品種の開発が行われています。福島県には、平成14年に誕生した「ふくはる香」、「ふくあや香」という県オリジナル品種があります。

いわき地域では主に「とちおとめ」、「ふくはる香」を栽培しており、いわき地域のいちご生産を支えるJAいわき市いちご部会では、環境に配慮した栽培に力を入れており、天敵※1や微生物農薬※2等を積極的に導入しています。

いわき市内のスーパーや直売所で福島県オリジナル品種を見かけた際は、是非お買い求め頂き食べてみてはいかがでしょうか。



※1：ハダニを捕食するカブリダニ等。
※2：病原菌の活動を抑制する微生物等。

いわき農林事務所からのお知らせ

○ふくしまの最新情報を「ふくしま 新発売。」に掲載していますのでどうぞご利用ください。

<http://www.new-fukushima.jp/index.html>

1 「がんばろう ふくしま応援店！」一覧

2 イベント情報

3 農林水産物モニタリング情報

(1) モニタリング情報検索

(2) 出荷制限等一覧表



ふくしまから
はじめよう。

Future From Fukushima.

◎ 皆様からのご意見・情報をお待ちしております。
福島県いわき農林事務所 企画部 地域農林企画課
〒970-8026 福島県いわき市平字梅本15番地
(県いわき合同庁舎 3階)
T E L (0246)24-6152 F A X (0246)24-6196
U R L <http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36270a/>



いわき農林水産ニュース

